

平成 30 年度 第 2 回嶺北地域公共交通協議会議事録（要旨）

〈日時〉 平成 30 年 5 月 25 日（金）午後 1 時から午後 3 時半まで

〈場所〉 本山町プラチナセンター 2 階ふれあいホール（本山町本山 569-1）

〈内容〉

（1）嶺北地域公共交通会議の設立について

（事務局）

資料 1 により説明。質問、意見なし。

（2）第 1 回嶺北地域公共交通協議会について

1) 嶺北地域内の公共交通についての意見について

（事務局）

資料 2-1、資料 2-2 により説明

（会長）

本山町において嶺北高校の公共交通の利用についてももう少し詳しく紹介いただけないか。

（委員）

現在の全校生徒数は 67 名で、1 年生 17 名、2 年生 30 名、3 年生 20 名となっている。

昨年までは、大豊から通っている学生がバスを利用していたが、現在バスを利用している生徒はいない。

学校の流れを説明すると、授業終了時刻 15:20、放課後は 15:40 からであるが、大杉方面行バスの最終便は 16:01 となっているので、部活動を行う生徒はバスに乗れない。

（会長）

高校生も公共交通の利用ニーズが大いにあると考えられるので参考としていただきたい。

（委員）

資料 2-2 に関して、スマートフォンや貨客混載の記載があるが、スマートフォンについては個人的には若い人だけではなく、高齢者も使えるようにする必要があると感じている。そうしないと、我々が高齢者になった時、高齢者は最新技術を使えないことになってしまうという危機感もある。

貨客混載について、貨物を乗せる車両に人もという説明が事務局からあったが、そのことについて個人的には賛成する。例えば、郵便収集車は、郵便ポストに時刻表もあるし、地域の真ん中にポストもあるという、かなり良いバスになるのではないかと考える。そういったことも積極的に考えてはどうか。

（会長）

スマートフォンについては指摘のとおりであり、貨客混載についても検討していただきたい。

2) タクシー事業者ヒアリング結果

(各町)

資料 2-3 より説明

(会長)

事業者の方より補足いただけないか。

(委員)

従業員は 4 人である。土曜日など忙しい日には臨時で 1 人（76 歳）運転手を雇っている。乗車人数は 3 台の合計であるので、1 台あたり 1 日平均 7～8 人である。飲食店からの利用が多いため夜の 12 時頃が多い。予約があれば 12 時以降も運行する。

町内のガス会社が事業をやめるので、ガス車の稼働が難しくなる。車両を変えないと営業できないが買い換えの自己資金がないため、廃業という考えも出ている。中古車もなかなかない。本山町で検討している山間部をめぐって、バスにお客さんを集める計画のほうを嶺北交通（有）でさせていただければ、会社もやっていけるのではないか。

(委員)

担い手がとても脆弱であると改めて分かった。新しいことを行ううえでそこに対応できるような事業体や担い手がいないと、ニーズを満たすことができない。担い手、事業体をどのように確保するかをしっかりと考えなければ、机上の空論となりかねない。網形成計画を策定するときに、第 3 セクターや企業連合などが運営する可能性についても計画に組み込む必要があるかもしれない。現状では、1 年で計画を策定することはできないのではないか。ニーズを把握することができ、それに応じた計画を立てる必要があるので、事業体、担い手を考えることが最重要ではないか。

(事務局)

乗務員不足という問題で、県では女性を対象とした運輸業の乗務員の確保といった事業を開始している。人口の約 51%が女性で、すべての産業で働いている方のうちの約 43%が女性であるが、運輸業では女性の割合が 2%程度しかいない。運輸業の仕事が女性でもできて魅力的であると発信し、興味を持ってもらい、乗務員を増やすといった取組みを始めた。地域の方だけでなく、移住という形で乗務員の仕事に就いていただいたり、他の仕事をしながら乗務員の仕事をしていただくこともできるのではないか。

(委員)

網形成計画を策定する場合においても、他から移住して乗務員になっていただくことも考えなければならない。移住後、大型 2 種の運転免許を取得してもらうという施策もある。

現状で運転できる人、2 種免許を取りたい人などをリストアップして割り振るしかない。

高校生の送迎については、なかなか担い手がないので、ボランティアも必要になるかもしれない。

貨客混載については、貨客それぞれのシステムで最適化されているため、まとめるとなかなか進まない。貨客をまとめてやる事業体や連合体を作る必要がある。

(委員)

高知市内では平成 21 年度に約 9%の運賃改定があり、給料があがっているため、高知市内に乗務員が流れる。募集しても応募人員もない。

(会長)

計画策定におけるさまざまな問題があるが、実現に向けて議論していく必要がある。

いろいろな実績やアイデアをもってこの地域に合わせて議論していきたい。

(3) 高知県嶺北地域公共交通網形成計画策定について

1) 網形成計画策定の進め方について

(事務局)

資料 3-1 より説明

(委員)

実態調査のやり方の説明をただで、網形成計画策定の進め方はなんら説明されていない。計画には、この地域の課題は何で、どのように解決するのか、いったい誰が何をやるのかについて記載しなければならない。今の説明ではそこに至るプロセスが一切ない。事務局とコンサルでやるということしかわからない。

この協議会のメンバーそれぞれがどこで何をやるかを決めるのに時間をかけるべき。

この地域が過疎で大変な状況であることは、この場にいる誰もが知っていることであって、その調査にこんなに時間をかける必要はない。

高校生のアンケートにおいて、高校生自身がやる気を出してもらわなければ意味がない。しかし、高校生はやってもらえないと思っているのが現状である。高校生がバスに乗ってくれるならこちら側が徹底的に施策を進めるという説明をしなければならない。

そのプロセスが何もない。結果、高校生たちには何もわかってもらえない。

報告書作成のプロセスならそれでよいが、結果を踏まえて何をそれぞれやるのかを教えてほしい。

今回の内容は地域の実態が書かれているだけであり、本来の計画としては、平成 31 年 4 月から何をやるのかといった具体的な内容が必要である。

(事務局)

今回の計画づくりを、コンサルに丸投げなどといったことはまったく考えていない。過疎化が進み、厳しい地域になっていることは皆さんご承知の通りである。

とさでん交通（株）がバス路線の見直しを表明した際、地域の方から大学病院への路線をなくしてほしいなどのお声をいただいたが、実際どれぐらいの方がどれぐらいの頻度でその路線を利用し

ているかなど現状の利用状況や課題を把握できていない。そのため、調査させていただきたい。

計画策定においても、委員の意見をまとめて計画を作っていくことは重々承知であるが、頻繁に協議会を開催することもできないので、事務局が協議会においてそのつど練り上げた意見を示し合わせていけば、おのずと作業が備わっていくのではないかと。

(委員)

計画策定まで協議会はあと2回しかないスケジュール。次回10月の協議会で、全く把握できていない計画(素案)を示されてもやる気にはならない。

意見を示し合わせるにしても、いつどこでやるのかを示してもらいたい。

調査結果はいつ出ているのか。このメンバーや地域住民等を交えた懇談会が必要ではないかと。

現在の調査がどのように役立つのか。

(事務局)

懇談会をどのように設けるかについては、今すぐには回答ができない。

当協議会では、多くの委員の参加を期待しているため、ご指摘の趣旨をしっかりと踏まえながら、実行していけるように10月に向けての段取りを考えていく。

(委員)

懇談会はどのような構成でどう動かすか今示す必要がある。

事業者、担い手が限られている中でどう生まれ変わっていくのか、高校生に的を絞って通学で来るようにするにはどうすれば良いのか、高齢者の移動はどうするのか。

そういったこと議論する部会のようなものが必要ではないかと。とても危機感をおぼえる。

(事務局)

進め方については、後日改めて書面にて報告させていただく。

(委員)

どのようにして、この地域の移動をよくしていくのかについて今日話し合うべき。

移動が不便であるこの地域をどれくらいのレベルにすればいいのか。高知市内や東京のように絶対にはできない。バス、タクシー、JRもそのレベルまではできない。

この地域において、どれくらいのお出かけ環境を目指していくのかという議論を今日決めておくべき。これを目指そうという意見を各組織が持たないと後ろのものがついてこない。

その思いがあれば、あとはどのようにしていくのかを決めることができる。

(事務局)

この地域の移動をどうしていくのかについては追加議題としてお願いできないかと。

(会長)

先ほどの調査をどのように使っていくのかを示していく必要がある。

懇談会と協議会はそれぞれ何をやっていくのかについては、後日、書面で報告とするか。

(委員)

調査結果がまとまる 10 月に次回の協議会の開催を予定しているが、調査とは別にどのような体制で検討していくのかも議論する必要があるのではないかと。

(会長)

10 月の協議会では体制の話と調査報告を両方行ってはどうか。

(委員)

もし、3 月までに網形成計画を策定するつもりであるなら、もっと綿密に予定を立てるべきである。

そもそも、網形成計画の策定を 3 月にこだわる必要はないのではないかと。

(事務局)

調査はやりながら、並行して一定のグループで集まってもらい、それぞれで困っていることなどを話し合ってもらう機会を設定したい。詳細については書面にて改めて報告する。

(委員)

地域の中で綿密に計画を練らなければならない。そのために目標を定める必要がある。

(事務局)

意見交換を行う場を 10 月までに複数回設定させていただきたい。

(会長)

こうしたいという目標を決定した上で、データやニーズをとっていく必要があるため、10 月に向けた段取りを事務局にお願いしたい。

(事務局)

細分化したスケジュールを立てる。

(会長)

小さな会で意見改めて聞けると思うが、この地域はどうしていききたいかという意見を聞きたい。

(委員)

この会議の目的は、田井線をどうしていくのかということではないのか。

(事務局)

そうではない。幹線のあり方の中で、路線バスのあり方を検討していくことにはなるが、とさでん交通（株）の田井線のあり方を検討するためだけに設立した会ではない。

(委員)

とさでん交通（株）の田井線とは別のことを議論しているのか。

(事務局)

実際の利用の状況、幹線交通においてどこからどこまで利用しているか利用者の意見を踏まえて改善していくことを目的としているので、その中で田井線のあり方も議論することになる。

(委員)

バスの路線の話をしているのならば、タクシー業者が集まる必要はないのではないか。

(事務局)

路線バスだけを検討するための会ではなく、どのように幹線と皆さんの居住地域とを結ぶかを議論するための会であり、公共交通活性化再生法の1つとしてタクシーも含まれているため、皆さんの協力が必須である。

(委員)

協議会がなければ、公共交通が悲惨なことになる。自分たちはこういう地域にしていくという宣言をすることが計画である。田井線だけでなくタクシー業者も変わっていかねばならない。

そのようなアピールをしなければ、国に勝手に作りかえられる。自分たちで考え出さなければならない。主張をして補助金を出してもらおう。そのような発想で臨んでいただきたい。

(会長)

交通がメインであるが、地域をどうしていくのが重要である。

(事務局)

大雑把なスケジュールとなってしまうので、わかりやすく、イメージしていただけるような細かいスケジュールを作っていく。

2) 路線バス乗降調査計画書について

(事務局)

資料 3-2 より説明

(委員)

平休1日の調査ならば、事業者に聞けばわかるのでは。そこでわからないものを調査すればいいの

ではないか。何十系統もあるようなところではこの調査は好ましいかもしれないが、規模の小さなこの地域においては好ましくはない。1日のデータだけで信頼性があるのか。

(事務局)

事前にどのような路線を課題として持っているのかを踏まえたうえで調査した上で、結果を精査したい。

(委員)

2年前にICカードのデータを元に分析をおこなっているのので、HPを確認してほしい。

現金客においては推定しかできていない。OD調査は実施していないため、今後の課題となっている。

聞き取りをするのであれば、現金客とICカード客、雨天時と晴天時を区分したデータを取っていただきたい。

観光客も含めて属性の違いを重要視していただきたい。

(事務局)

基本的には晴天時において調査を行い、アンケートの設問において雨天時の場合はどうするのかなどを加える方法が考えられる。

(委員)

雨天時はとった方がいいが、いつ降るか分からないという問題もある。サンプルでも良いので1週間ぐらいピンポイントで調べた方がいいのでは。全路線ではなく一部でもよい。

高校生や高齢者など乗らない人を乗せるにはどうしたらいいのリアリティを持って考えてもらう必要がある。乗らない人にはヒアリングやワークショップのほうが向いている。雨天時に乗る人は晴天時にも乗る可能性があるが、他に便利なものがあるから乗らない。雨天だけでなく晴天でも乗ってもらう方法を提案する必要がある。

(会長)

個別にデータがあるもの、調査しなければならないものを確認していただきたい。

3) 各種アンケート調査の計画について

(事務局)

資料 3-3、3-4、3-5 を説明

(委員)

65歳以上アンケートについて、年齢①～⑤間での項目は必要ない。自宅から駅やバス停までの所要時間において30分以上の方が多い。アンケート対象者について、現状困っていない人では、必要なデータにならないのではないか。どのようにアンケートを行っていくのか。

大豊町では路線バスが一部にしか通っていないため、路線バスだけでなくJRについての質問内容あ

るのが当然ではないか。

(委員)

大豊町の学生は路線バスを一切使用していない。嶺北高校に通っている生徒もいない。高知への通学においても運賃が JRの方が安いので、すべての人が路線バスではなく JRを使用しているため、学生に対するアンケートの必要はない。

高齢者の場合には病院等に行くのにバスを利用している。大豊町の場合には高齢者以外は参考にならないのではないか。

(会長)

関係者の意見を反映したほうがいい。

なぜアンケートを実施するのか、意味があるのかどうか、理由をしっかりと考える必要がある。

(委員)

各種のアンケートを実施するとバスに対する要望ばかりになるが、必ずしも地域の利用実態に即したのものにはなっていない。要望があってもバスを動かす人手もない。このアンケートは都市部の方々を対象としたようなアンケートであり、嶺北地域とはマッチしていない。嶺北地域の実態はよくわかっているので、移動についてどの程度困っているのか、自家用車で動けるのか、役場の周辺に家があるのか、どこへどの程度移動しなくてはいけないのか、公共交通はどの程度でいいのかといった、移動の程度が項目として重要となってくるのではないか。ニーズがわかれば事業者はそれに沿った路線を設定していく。調査項目は全面的に見直していただきたい。

(委員)

アンケートはしっかり進めていくべきであるが、嶺北地域はどれくらいのレベルの移動を必要としているのかを話し合うべきではないか。

外から来る場合、大杉駅をどのように利活用していくのが1つの課題ではないか。例として特急が半分しか停車しないなどが挙げられる。

香川県の小豆島では、島の病院や学校を1つに統合した際、高校生は交通安全の観点からなるべくバスに乗せるよう、高校生向けの通学定期補助やバスの運賃を安くしたり、保護者に対して利用促進を行った結果、200人以上の高校生が定期券を利用するなど、思った以上に利用をしていただけた。

嶺北地域においてどのレベルの移動手段を確保していくのかを議論した上で各種実態調査を実施していけばよいのではないか。

(委員)

アンケートについては、指摘のあったとおり都市部向けの設問になっているのでブラッシュアップの必要がある。ただし、困っているのかいないのかを聞いた場合には、基本的には公共交通がなくても困っていないのではないか。調査した場合にその数字が出ることはよいのではないか。

高齢者へのアンケートではなく、全世帯に配布して、中年の人たちにもアンケートにふれてもらい、

あの協議会は、本当に考えているんだと地域の人に思ってもらい、地域の人に本気になってもらうためには一定の効果があるのではないか。

若い人向けには、この地域将来なにもしないと本当に公共交通の維持が困難になるかもしれない、ということを伝えて、それでも関係ないということであれば、それはそういう地域だということだか、そういった観点からもアンケートの対象を検討した方がよいのではないか。

(会長)

アンケートについては、皆さんの意見を参考に検討していただきたい。

それとは別に、この地域でどのくらいの移動を確保していきたいのか。それを達成するためにどうしたらよいのかを考えるためのアンケートとしてほしい。

どれくらいの移動を確保すればいいのかということについて、意見を伺いたい。例えば、嶺北高校で抱えている課題やこういう風にするとバス通学するというような意見はないか。

(委員)

高校生は困っていないというのが実情である。自転車通学の学生はおおよそ5km圏内から通学している。5km圏内であれば、バスを待っているよりも自転車の方が早くて便利で、自由に時間を使えると感じているのではないか。山の奥深くから通学している学生は保護者が送迎している。

(委員)

困っていないのはこの地域で生まれ育ったからではないか。私は人口10万人程度の都市で生まれたが、そこではバス通学している学生も結構いた。そういう地域では、バスがあるのにも関わらず、自転車で通学しなければならないのは、かわいそうだと言う人もいる。

なぜならば、バスや電車というのは、乗っている間は自由に時間が使える。自転車の移動中は何もできない。最近はバスや電車の中でWi-Fiや電源が使えるようになっているものがあり、利用者が増えたところもある。停留所まで自転車で移動する場合に雨にぬれない停留所が整備されている。そうするとそういう場所が溜まり場になる。溜まらずにそれぞれが勝手に通学していると、仲間になれず卒業するとバラバラになる。そうすると、地域に貢献するような人が生まれてこないという、地域に対して悪い影響がある。そのため、溜まれるような環境を各停留所に作っておくことは、地域にとって非常に大切だという考え方もある。

しかしながら、この地域ではそういうことを考えもしないのではないか。なぜならば、自転車で通える子供は自転車で通学すればいいし、送迎してもらえ人がいれば送迎してもらえばいいという話になっているから。

そこがポイントで、交通工学ではニーズと需要は異なると言われている。需要とは既におこっているもののことを言うが、この地域では公共交通の需要はない。ニーズは気付いていないこと。ここに生まれた以上思っていないこと、思ってもみなかったことのこと。

だから、アンケートで聴いてもニーズは聴けない。

アンケート調査では聴けないことだが、もしこういうものがあってこういうものなら、今までには地域になかった新しい暮らしができるが、そういうものが欲しいかということ問いかねなければいけ

いない。そのためには、懇談会やワークショップが必要ではないか。アンケート調査だけでは、バスやタクシーがいらないという意見になるのではないか。

地元の方々に、もし、バスやタクシーあるいは新しい交通手段があったら、何ができるのかということは何回か議論をする必要があるのではないか。

現在のアンケート項目は、公共交通を使ったことがある人か、使ったことがある人が周りにいる人向けの需要を把握するためのアンケートになっている。

この地域にはニーズはあるかもしれないが、需要はないので地域の衰退を止められない。

例えば、このメンバーのコアなメンバーでワークショップをして、こんなことがあり得るということを議論してはどうか。

(事務局)

ニーズの把握は、地域の中の人だけに聞いても指摘の通りなかなか出てこないということもあるので、例えば他の地域から移住してきた若い人に今のバス路線を聴いてみると、外からの意見が聞けて面白いのではないか。

(委員)

我々もアンケートを行ってきたが、唐突に投げこまれたアンケートでは、回答の結果も希望的観測がほとんどで使い物にならない。サイレントマジョリティの意見をどう引き出すのが大切。

そのためには、こちらの考え方をまず伝えて、それを前提にしてアンケートを行うということが必要となる。

前提条件として、こちら側がやろうとしていることを伝えて、アンケートを行うことで、1工程をはぶける。私どもアンケートを行う際にはそういった方法を用いているので参考までにお伝えする。

(会長)

政策づくりにおいても同様の手法で行っている。例えば、高校生向けのアンケートにおいて、Wi-Fiを整理したら、利用するかを聞いてみてはどうか。

高齢者の立場からはどうか。

(委員)

大豊町では、10年ほど前は、白タク問題があった。NPO法人がグレーゾーンのサービスをやっていた。その後、大豊町が乗合タクシー事業や通院サービス等を実施している。

NPO法人を利用していたのは、一人暮らしの交通手段のない不便な地域に住んでいる人だったため、タクシーを使うのは経済上厳しい。

必要がない人はよいかもしれないが、大豊町にも公共交通の空白地域は沢山あるので、そういう地域では届け出の必要のない支え合いのサービスが必要ではないのか。

(会長)

そういった意見も網形成計画の中に入れてもよいのではないか。

(委員)

登録許可の必要のない輸送については、今年の3月の国の通達により具体的な例が示された。

私自身は安全性の課題があるので、個人的には賛成しておらず、もし、やるのであれば、タクシーか自家用有償の方がよいと考えている。そもそも車両輸送をするボランティアの方がいるのかという課題もあり、持続可能ではないのではないかと。

タクシー事業者ができず、自家用有償でやるのであれば、地域公共交通会議で議論し、網形成計画に書くべきことではないか。独居老人でも最低限のおでかけを確保することが地域として目指すべきところであるということ網形成計画に書くことにより、タクシー事業者がやること、やれないこと、やるべきではないところは、別の手段で行う等が描かれることが非常に重要ではないか。

(会長)

商工会の立場から、地域の公共交通についてどうすべきかという意見をお願いしたい。

(委員)

商工会では買い物弱者への支援として、ヤマト運輸と連携して、見守り隊と宅配サービスをやっている。

私はこの会議に2回目の出席だが、自動車が運転できて、公共交通をあまり利用していなかったが今日は色々教えてもらった。これまでのペーパーだけで終わっている会議という意見を聞いて感動した。こういう会議の中で何をやらなければならないのか、本音の話をしていくべきではないか。

嶺北広域で公共交通の1つのルールをつくり、交通弱者の支援をしていければと思う。

(会長)

今日の議論で協議会の意義が高まってきた。計画の実行性が高まっていくように進めたい。司会を事務局にお返りする。

(4) 閉会

(事務局)

貴重な意見をありがとうございました。委員の方から意見が出るのはごくまれで、良いメッセージをいただき、前向きな意見が出てよかった。

改めて、閉めとして叱咤激励をいただけないか。

(委員)

協議会としてではなく、このメンバーで本音の議論をした方がよい。

私も今日は1泊するが、それだけでは地域のことはわからない。

地域に住んでいるのでこんなことはできないと思っているかもしれないが、地域は変えられるんだということもあるし、地域で変えていかなければならないこともある。

私は刺激をあたえるために来ている。

計画をつくっていくのに地域はどうしていったらよいのかという議論をしてはどうか。

計画はどのような風にしたいのか、そのためには何をしなければならないのか、誰と誰が組まなければならないのかを書くものだから、その人たちのところが、結びつくような意識合わせの会が7~8月に必要ではないか。

(事務局)

アンケートをしたいわけではなく、地域の方の意見を把握したいのでそういった方法を検討していきたい。

(事務局)

先ほど、大豊町社会福祉協議会よりアンケートの方法についてどういった方法で行うのかという質問があったが、郵送配布回収ではなかなか回収率が上がらないので、4町村のやり易い方法で調整をしている段階である。

高校生については、意味がないという指摘もあったが、今、保護者が大杉駅まで送迎しているという話を聞くが、安くて便利な方法があれば、そちらを選択するということもあるのではないかということでそういったサービスについても、聞いてみたい。

次回の日程については、当初10月を想定していたが、全員かどうかは別として、改めて日程調整してご連絡させていただく。

以上